五色沼湖沼群 環境調査へ

福島大、県など 25年ぶりに 水色変化の指摘受け

福島大(福島市)と県、環境省などは8日から、北塩原村の五色沼湖沼群で湖水と周辺環境の大規模な調査を始める。同湖沼群は青白色を基調に多様な色合いを持ち、裏磐梯を代表する観光地だが、最近では外来植物の繁茂や水質の悪化、水色の変化などが指摘されていた。本格的な調査は約25年ぶりという。

湖沼群は1888年の磐梯山噴火で長瀬川がせき止められて形成。酸性の地下水が流入し、中和される過程でアルミニウムなどを含む「アロフェン」という物質が形成され、特徴的な青色を生み出しているとされる。現在は水辺のコカナダモやヨシが増え、一部で湖水の中性化も進行。水中の物質や微生物量が変化し、色の変化を起こしているとみられる。

調査対象は毘沙門沼や赤沼、深泥沼など11湖沼。pHや水質を示すCOD(化学的酸素要求量)、大腸菌群数のほか、周辺の土地利用の変化や植生、生物の生息状況なども調べる。さらに湖水の浮遊物や堆積物などを採取し、成分を分析。光の波長ごとの反射率を調べて、水色の変化も解析する。

8日に関係団体で「裏磐梯の湖沼環境を考える会議」を発足し、中旬から本格的な調査を開始。調査結果の公表は来年10月末を予定している。

福島大の佐藤一男特任教授は「80年代半ば以降のデータが無く、環境が変化しているかすら正確には分からない。現状と問題点を明らかにし、今後の環境保全の基礎資料にしたい」と話した。

県内では、猪苗代湖も90年代後半から湖水の中性化と水質の悪化が進行。環境省の湖沼水質ランキングで05年度まで4年連続全国1位だったが、その後はランク外が続いている。【関雄輔】

福島民報 平成23年11月3日(木)

会 (第三種郵便物認可)

大島 福 裏磐梯の五色沼 初調査へ

環境の現状や課題 探る

福島大共生システム理工学類の教授らで構成する研究チームは裏磐梯の五色沼湖沼群の環境調査を実施することを決めた。二日、同大が定例会見で発表した。

研究チームは同大の共生システム理工学研究科研究プロジェクト型実践教育推進センターの佐藤一男特任教授を筆頭に構成する。オブザーバーに環境省裏磐梯自然保護官事務所の新田弘市主席自然保護官を迎える。八日に北塩原村役場で会合を開き、「裏磐梯の湖沼環境を考える会議(仮称)」を正式に設置する予定。湖沼周辺の環境について地理的要因や生態系、周辺の経済活動などの視点から現状と課題を調べる。

近年、五色沼周辺の住民から水色の変化や景観悪化などが指摘されている。pHの変化やコカナダモなど外来植物の繁茂が原因と考えられるが、背景は分かっていない。佐藤特任教授は、「五色沼湖沼群の環境調査はいまだに行われていないため原因を明らかにする必要がある」と指摘。十一の湖沼を調査し、今後の生態系や水質など環境保全対策に生かす。